

川の上流を眺めれば、はるか遠く阿蘇岩山まで幅およそ3^{キロ}、長さおよそ7.5^{キロ}にわたって原野が広がっている様子を眺めることが出来ます。

これから川に沿って進む方向はおおよそ東南の方角で、12^{キロ}ほどでタカウナイという小川を越え、さらに12^{キロ}ほど進んでトマンベマナイという小川の川原に小屋をつくって野宿しました。

2月21日

非常に厳しい寒さに目を覚ますと、月が氷雪を照らし、まるで鏡のように輝いています。さあ、夜明けとともに出発です。4^{キロ}ほどで石狩川水系のルベシナイ川を過ぎ、さらに2^{キロ}進んだところで、幅13～15^{メートル}ほどの当別川の氷の上を歩いて渡りました。当別川の源流は阿蘇岩山と厚田の山の間から流れ出ているということです。

ここからは東北東に向かつて4^{キロ}ほど進みました。小さな山のユワエサンを過ぎてさらに4^{キロ}ほど進み、川幅およそ3.5～5.5^{メートル}の篠津川を渡った辺りから、高原になり、見晴らしがよくなりました。北は樺戸岳、東には夕張岳、東北東には奥徳富岳、南南東には島松岳の位置に当たります。篠津川の上流には篠津山があり、樺戸の山々と連なっているといえます。

雪が解けた道は足が取られてしまい、思うように進むことが出来ません。6^{キロ}ほど進んで小川のシユマウニウスナイ川を越え、さらに4^{キロ}ほどで、標津岳に源流があるという川幅11～13^{メートル}の標津川を越えました。

夕方になって雪が降り始め、野宿する仮小屋が強風に倒されないよう、木を切って重石にして眠りました。寒さといったら、虻田を越えた時よりもさらに厳しく、アイヌたちが交替で起きて、夜が明けるまで火を焚き続けてくれました。

小屋から500^{メートル}ほどと思われる辺りにオオカミが2、3頭いてしきりに吠える声が聞こえてきます。その声といったら熊が吠える声よりも何となく物寂しく、その上、雪の山中に吹き荒れる風